

第2節 花積下層I式土器と塚田式土器

はじめに 上原I遺跡IIでは縄文時代前期初頭の集落が発見された。該期の住居跡は、本調査で9軒（ただしSI26は掲載しうる土器が出土しなかったが、平面プランや覆土から前期初頭と考えられる。）、現在、整理作業中の事業団調査部分で8軒検出し、合計17軒となる。

周辺遺跡における前期初頭の住居軒数は、坪井遺跡IIで1軒（長野原町教育委員会2000）、林中原I遺跡で1軒（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2014）、現在、整理作業中の事業団調査部分の林中原II遺跡でも数件検出されている。ただし、坪井遺跡IIを除くこれらの遺跡はさほど離れていないので、同時期に何らかの関係性を有していたものと考えられる。

さて本調査出土の該期の土器群は、北関東（群馬県）に多く分布する花積下層I式土器と東信地域に多く分布する塚田式土器で構成され、両者の特徴を合わせ持つ土器も出土した。ここでは、これらの土器群について軽くではあるが触れてみたい。

花積下層I式土器 SI19第36図1は口縁部に撲糸側面圧痕による菱形の文様が施文され、体部には0段多条LR、RL縄文による横位羽状縄文が施文される。SI25第61図1は沈線で複合鋸歯文が施文され、体部には0段多条LR、RL縄文による横位羽状縄文が施文される。同図3は撲糸側面圧痕による渦巻文が施文され、体部には0段多条LR、RL縄文による横位羽状縄文が施文される。SI27第70図1・2は炉体土器で平底である。1・2の上の覆土中に同図3があり、0段多条LR、RL縄文で縦長の菱状構成をとる鋭角羽状縄文が施文されることから、3は花積下層I式期に帰属するだろう。このことから1・2は3と同時期ないし古いものと考えられ、文様などの特徴から、平底の花積下層I式土器と思われる。

この他にも本遺跡では、幅の狭い口縁部文様帯に撲糸側面圧痕による文様を持つものが見られるなど、花積下層I式土器の特徴を持つものが主体的に出土している。

周辺遺跡の事例として、坪井遺跡IIのSK18・35などでも口縁部に撲糸側面圧痕による文様を持つ土器が出土している。とりわけSK35の資料（第13図1）は残存状況も良く、口縁部の内外に撲糸側面圧痕が施文され、体部に縦長菱状構成をとる鋭角羽状縄文が施文される。

塚田式土器 SI19第36図5は口縁部に隆帯が巡り、縄文が施される。SI22第48図5も同様で、小波状を呈す。SI25第61図4は口縁部に逆T字状隆帯が明瞭ではないが巡る。ここに挙げた3点とも縄文は2本撲りの縄である。

周辺遺跡の事例として、上述の坪井遺跡IIのSK18・35などにも、口縁に隆帯が巡るものが少量出土しているようである。事業団調査部分の林中原I遺跡では、52区1号住居跡から同様の資料が出土している。この住居跡からは器形を窺える資料（第13図2）が出土しており、口縁部に隆帯が巡り砲弾形の器形を呈すと考えられ、塚田式土器であろう。

花積下層I式土器と塚田式土器の特徴を合わせ持つ土器 第14図1は口縁部に撲糸側面圧痕による文様が施文される。体部には0段多条LR、RL縄文による縦長菱状構成をとる鋭角羽状縄文が施文され、同図2にも共通する。これらは花積下層I式土器の文様を持つ。ただし、1のように口縁部に巡る隆帯は塚田式土器の装飾方法であるし、胴の長い器形は塚田式土器の器形要素であり、御代田町塚田遺跡の資料や同町下弥堂遺跡の資料（同図4・5）に類似する。

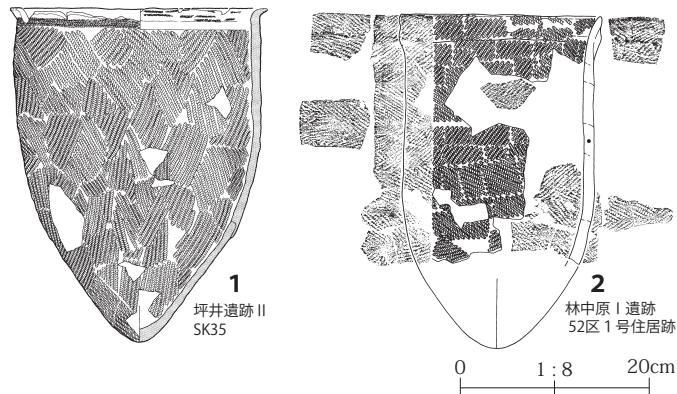
なお同図3の旧東部町鍛冶屋遺跡では口縁部に撲糸側面圧痕による文様を持ち、花積下層I式土器の文様である。だが一方で口縁部に刻みを伴う隆帯が巡る点は、塚田式土器の装飾方法であろう。

以上のように、花積下層I式土器と塚田式土器の特徴を合わせ持つ資料が、吾妻郡西部や東信地域で出土している。両土器型式の分布域が接する、もしくは重なる地域の特徴を示しているのだろう（註1）。

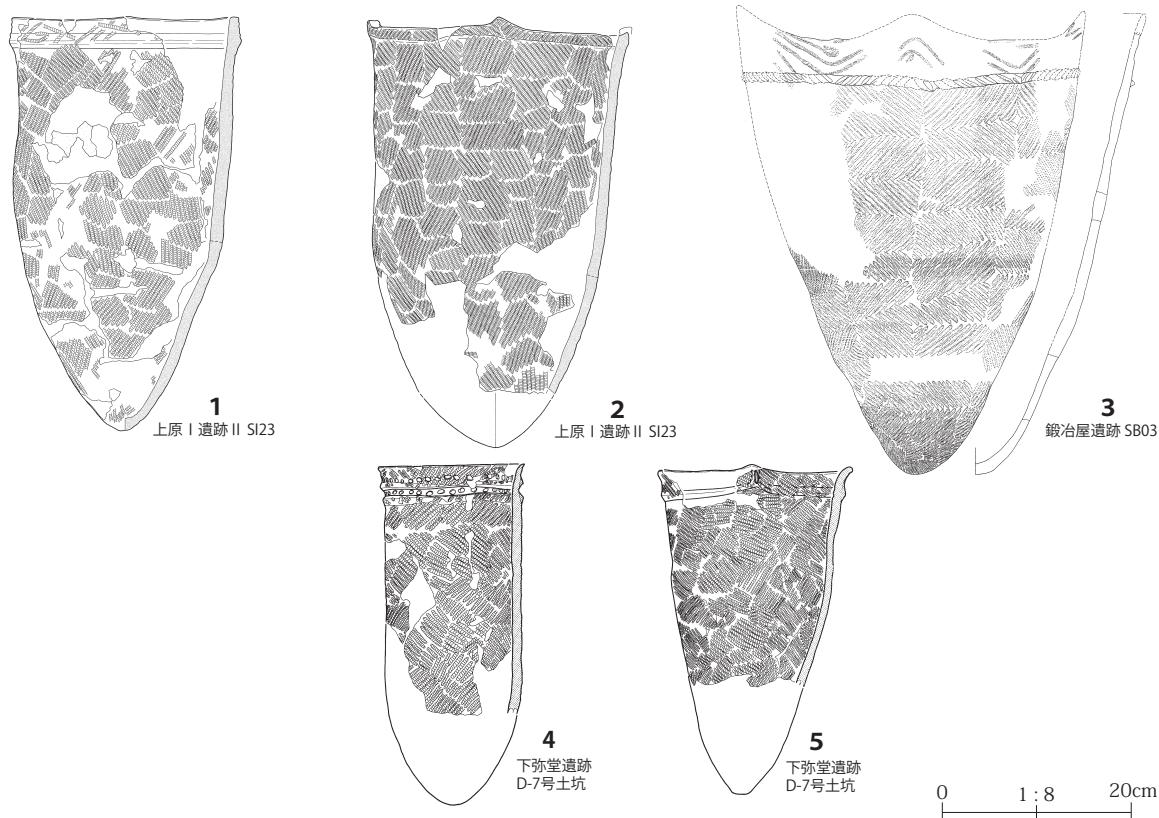
おわりに 以上のように本遺跡における前期初頭の土器群は、花積下層I式土器を中心に構成され、塚田式土器や両者の特徴を合わせ持つ土器が伴う状況である。なお本遺跡では新しい時期のものも、少量出土してお

り SI25 第 62 図 15 は、幅の広い文様帶に燃糸側面圧痕による渦巻文が重畠する花積下層 II 式土器に該当する。同図 2 は肥厚口縁となるが、中道式土器に併行する可能性がある（註 2）。

非常に拙い考察であるが、上原 I 遺跡 II の前期初頭の土器の様相の理解の役に立てれば幸いである。



第13図 周辺遺跡の前期初頭の土器(1/8)



第14図 花積下層 I 式・塚田式土器の両者の特徴を併せ持つ土器と塚田式土器(1/8)

註

- (1) 両者の特徴を合わせ持つ土器が存在する状況については、すでに谷藤氏が述べている（谷藤 2006）。
- (2) 上原 I 遺跡 II では該期の住居跡が接近して 2 列検出され、接近する住居同士は時間差を有する可能性がある。切り合い関係を有する SI25・26 がその事例である。よってここで花積下層 I 式土器とした土器群も、住居単位などで今後細分される可能性があろう。

参考文献

- 東部町教育委員会 1988 『鍛冶屋遺跡』 東部町教育委員会
 御代田町教育委員会 1994 『下弥堂遺跡』 御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書 第 17 集
 長野原町教育委員会 2000 『坪井遺跡 II』 長野原町埋蔵文化財調査報告 第 7 集
 谷藤保彦 2006 「周辺地域における塚田式土器」『長野県考古学会誌』118 号 長野県考古学会
 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2014 『林中原 I 遺跡・長野原城』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 43 集